時の話題

第31回 国際農業機械展 in 帯広

（社）北海道地域農業研究所 特別研究員
斉藤 勝雄

「新世紀農業さらなる飛躍へ」をテーマに 四年に一度開催される「第三十一回国際農業機械展ｉｎ帯広」が七月十三日（木）～十七日（月）の期間、好天の続く帯広市北愛国交流広場にて開催された。

主催はホクレン農業協同組合連合会と（社）北海道農業機械工業会・十勝農業機械協議会の共催で、全国はもとより欧米各社、韓国や中国からの参加もあり、九八企業、四研究機関団体が二三〇の展示ブースを設けて約二、〇〇〇点の機械、システムを展示した。

より安全で安心な農産物へのニーズに応え、日本の食糧基地としての自覚の元に、離農・高齢化といった問題を抱えながらも、労働力の不足対応にとどまらず、海外農産物との競争激化の中で、より高品質で生産性の高い農業の確立のために、積極的に機械導入を検討する意欲的な農家が、炎天下にもかかわらず熱心に展示実演に見入っていた。

欧米の主要メーカーはもとより今回韓国農業機械のメーカーが広いブースを設けて積極的にＰＲ活動を行っていた事が印象的であった。

また展示機械はますます大型化が進み、ＩＣコントロールの汎用化と共に中耕・除草といった管理用機械、収穫後の選別保管システム、また近年注目されているバイオマス

システムに関する特別展やシンポジウムにも熱心な参加者が多数見られた。

◆　◆　◆　◆　◆

会場には三七五馬力のトラクターや巨大な自走式ビートハーベスターが注目を集めていたが、これらは現在進行中の大型法人経営や、コントラクタによる導入が検討されている。

世界の最新の機械開発はこれら大型機械に反映されているように感じられた。それで、地域農業・農地維持の施策として、集落規模の大型効率機械営農システムの構築とその関連機械化への補助事業を創設してはどうか。地域の活性化と耕地維持は必ずしも個別所有の効率的な作業機によるとは限らない。むしろ、相互扶助機能を持つ集団に対してこそ最新鋭の機械導入によって支援する必要があろう。場合によってはコントラもその対象になると考えられる。まさにそれに最適と思われる最新の機械が勢揃いしていた。

◆　◆　◆　◆　◆

一方で農業機械の開発製造を支える道内外の中小農業機械メーカー、特に作業機を主力商品とするローカル中小メーカーからは、次の問題点も聞かれた。

近年のＩＣやロボットを組み込んだ最新技術開発だけでなく、北海道の特殊条件を組み込んだ機械製造技術の継承に難問を抱えている。それは、北海道農業の盛衰にあわせて雇用を調節しなければならなかった中小メーカーの宿命と言えるかもしれないが、深刻な問題である。構造改善事業を柱とする各種補助事業による大型機械の大量導入と、いわゆる団塊の世代の新規雇用が合致した。その世代が今定年を迎えつつある一方、その世代が土と汗にまみれて獲得した北海道の土壌条件に合わせた機械開発改良のノウハウを伝承すべき、油ののった三〇代の雇用が少ないという問題をどのメーカーも抱えている。しかも若者たちは、泥臭いそれらの技術よりも最新のＩＣ関連の技術開発の方を好む。将来を見据えた人材の確保、技術の継承のためのシステム構築の面で業界をあげた対策が必要であろう。